

○3者ともC・D評価であるもの

（質問事項 22）

教師：長期・短期留学制度の充実等を図り、国際理解教育を推進している（D）

生徒：国際交流の取り組みが盛んにおこなわれ、異文化理解に役立っている（C）

保護者：学校では国際交流が盛んにおこなわれ、異文化理解に役立っている（C）

- * 昨年度につづきコロナ禍の影響で、国際交流事業（留学、海外修学旅行等）の中止を余儀なくされたことから、このような結果になった。アンケートの結果を受け、「英語で聞く落語」「外国語大学での異文化体験」の希望者を募り実施し、異文化体験の機会を保障した。次年度は感染状況の改善をみながら、短期留学などの実施に向けて取り組んでいきたい。

○3者のうちの2者がB評価であるもの

（質問事項 15）

教師：課題を抱える生徒の早期発見に努め、職員間で情報共有と組織的な対応を行っている。（A）

生徒：担任の先生をはじめ、学校の先生に気軽に相談することができる（B）

保護者：先生は、子どもの悩み等について気軽に相談に応じてくれる（B）

- * 相談を受けた教職員が時間をかけてゆっくりと丁寧な個別対応ができていないことで生徒に不満が出た場合や、生徒からの言葉による訴えに気づけず、課題そのものに気付いていない場合もあるかもしれない。生徒や保護者の期待に応えられるよう、さらに校内体制を充実するように改善に努める。

（質問事項 19）

教師：ごみの分別・計量、節電等省エネに努め、環境問題への意識の向上に努めている。（B）

生徒：節電やゴミの分別をこころがけている（A）

保護者：子どもは、節電やゴミの減量をこころがけ、環境に配慮している（B）

- * 今年度もコロナ禍の影響で、十分な取り組みはできなかったが、生徒は、節電・ゴミの分別などを心がけた。一方、保護者、教職員からは、まだまだ改善の余地があると考え厳しい結果となったと考える。全校あげて環境問題への関心を高め、改善が目に見えるようにしていきたい。

（質問事項 23）

教師：課題研究を通して自ら考え、発進できる人材・起業家養成を行っている。（B）

生徒：課題研究を通じて、自ら考えたりさまざまな人たちとの交流ができたりしている（D）

保護者：学校では課題研究を通して、自ら考え地域に貢献できる人材育成に努めている（B）

- * 原因として、コロナの関係で、インターンシップなど従来の取組に制限がかかり、十分な学習機会が保障できていないことで教師や生徒に不満が残った。
一方、保護者からは、校内での学習を通じて、限られた学習機会ではあったが、他校にみられない学びを通じて、保障できたと評価されたのではないかと考えられる。

○ 昨年度と比較して評価が高くなっているもの。

（質問事項 21）

教師：SPH事業の成果を生かし、大学との連携を推進するとともに、特色ある教育活動に取り組み、商業高校としての専門教育の充実・発展と進路意識の向上を図っている。（A）

生徒：大学との連携などで専門的な教育や助言などを受け、進路意識の向上につながっている。（B→A）

保護者：学校では、大学との交流が盛んに行われている。（B）

- * 中間評価では、保護者や生徒の意識が低く個々の生徒への指導について改善材料であったが、近江商人探究、進路指導の取り組みなどにより生徒の意識高揚につながったと考える。